

ムハンマドによる非ムスリムへの慈悲（後半）

説明： その生涯を通じて自身の使命に敵対し、殺害を企てた者にさえも示された、預言者の非ムスリムに対する慈悲。後半。
より M . アブドゥッサラーム (© 2010 IslamReligion.com)
掲載日時 13 Sep 2010 - 編集日時 13 Sep 2010

カテゴリ： [記事](#) > [預言者ムハンマド](#) > [彼の性格](#)

カテゴリ： [記事](#) > [現代における諸問題](#) > [イスラームとノンムスリム](#)

預言者による慈悲は、彼の叔父であり、彼の最も愛した人物の一人でもあったハムザを殺害し、その死体を残虐にも損傷した者にまで及びました。ハムザは初期のイスラーム改宗者の一人であり、クライシュ族におけるその地位と影響力により、ムスリムに対する危害を最小限に食い止めた人物でした。アブー スフヤーンの妻、ヒンドのエチオピア人奴隷は、ウウドの戦いにおいてハムザを探し出して殺害しました。マッカの無血入城の前夜、アブー スフヤーンはイスラームに改宗しましたが、そのことについての預言者（神の慈悲と祝福あれ）による復讐を危惧しました。しかし預言者は彼を赦し、長年に渡る敵対行為に対しての償いを一切要求しなかったのです。



ヒンドはハムザの殺害後、その遺体を切り開いて肝臓や心臓を取り出し、切り刻みしました。後に彼女が静かに預言者のもとを訪れイスラームに改宗したとき、彼は彼女の姿を認識しましたが、何も言いませんでした。彼女は彼の雅量と荘厳さに心を打たれてこう言いました：

「神の使徒よ、私の目にとってあなたの天幕よりも忌々しいものはありませんでした。しかし今日、私の目にとってあなたの天幕よりも愛おしいものはありません。」

アブー ジャハルの息子イクリマは、預言者とイスラームにとっての大敵でした。彼はマッカの無血入城の後にイエメンへと逃走しました。彼の妻がイスラームへ改宗した際、彼女は自らの庇護のもと、彼を預言者ムハンマドのもとに連れて来ました。預言者は彼を目にすると非常に喜び、次の言葉で挨拶をしたのです。

「騎手の移住者よ、ようこそ。」

マッカの支配者の一人であったサフワーン ブン ウマイヤも、ムハンマドとイスラームにとって大敵の一人でした。彼はムハンマド殺害の見返りとして、ウマイル ブン ワハブに報酬を約束しました。マッカが攻略された際、サフワーンはイエメンへと逃れるための船を探しジェッダへと向かいました。ウマイル ブン ワハブはムハンマドのもとにやって来て言いました：「神の使徒よ！彼自身の部族の長であるサフワーン ブン ウマイヤはあなたによる危害を恐れて逃亡し、海に投身すると脅していますぞ！」預言者は、彼の身の安全を保証する知らせを彼に送りました。そして彼は戻って来ると、2ヶ月間の選択の猶予をくれるようムハンマドに要請しました。彼には4ヶ月間の猶予が与えられ、その後自らの自

由意志でイスラームに改宗したのです。

ジャービルブンアル＝アスワドも、ムハンマドとイスラームの危険な敵でした。彼は聖預言者の娘ザイナブがマディーナへの移住を決意した際、彼女に深刻な傷を負わせました。彼女は移住を始めた際に妊娠しており、マッカの多神教徒らは彼女の出発を阻止しようとしてました。この男、ジャービルブンアル＝アスワドは彼女を襲い、意図的に彼女がラクダから転落するよう仕掛けたのです。その落下によって彼女は流産し、彼女自身も重傷を負いました。彼はそれだけでなく、ムスリムに対して他にも多くの犯罪を犯しました。彼はペルシャへの逃亡を望みましたが、ムハンマドは自分のもとを訪れた彼を寛大にも赦したのです。

またクライシュ族はイスラームの最大の敵でした。ムハンマドが預言者としてマッカに住んでいた13年間に渡って彼らは彼を非難し、嘲笑し、暴行を加え、肉体的にも精神的にも迫害したのです。彼らは預言者の礼拝中に、彼の後からラクダの胎盤を投げつけたり、彼と彼の部族をボイコットし、堪え難い社会的制裁を課したりしたのです。彼らは預言者の殺害を何度も策略した上、彼がマディーナへ脱出した際には、アラブの諸部族を総勢して幾度にも渡る戦争を仕掛けて来たのです。しかしながら、彼が1万の軍勢を連れてマッカに勝利の入城をした際、彼は誰一人に対しても復讐することがありませんでした。預言者はクライシュ族にこう言ったのです：

「クライシュ族の人々よ！あなた方は、私があなた方に何をしようか？」

良い反応を期待し、彼らはこう言いました：「あなたは善いことをするでしょう。あなたこそは高貴な兄弟の息子である、高貴な兄弟なのですから。」

すると預言者は言いました：

「ならば、私はヨセフが彼の兄弟に言ったことと同じことを言おう：『あなた方に咎めはない。』行くのだ！あなた方は自由の身だ！」¹

私たちは歴史をくまなく見回しても、これ程までに慈悲がかけられた例を滅多に見つけ出すことは出来ません。イスラームに対する数々の戦争を仕掛けた危険極まりない敵、アブー スフヤーンでさえ、家に留まり全く危害を与えなかった他の人物同様に赦されたのです。

預言者は寛容に徹した人物でした。いかに大きな犯罪または侵略であれ、彼にとっての赦しに勝るものはなかったのです。次のクルアーンの節も言及しているように、彼は寛容と慈悲における最も完全な例なのです。

「（ムハンマドよ）寛容を守り、道理にかなったことを勧め、無知の者から遠ざかれ。」（クルアーン7：199）

彼は常に寛容さと親切な態度による善をもって悪を退けました。それは彼による、解毒剤は毒に優るといふ観点からでしょう。愛は憎悪に優り、侵略は寛容によって勝利するという教訓を彼は信じ、実践しました。彼はイスラームの知識によって人々の無知を、そして親切で寛容な処遇によって人々による愚かさや悪を乗り越えたのです。彼はその寛容さによって、罪の奴隷となっていた人々を解放し、彼らをイスラームの大きな味方に変えたのです。彼は次のクルアーンの節を体現していたのです：

「善と悪とは同じではない。（人が悪をしかけても）一層善行で悪を追い払

え。そうすれば、互いの間に敵意ある者でも、親しい友のようになる。」（クルアーン 41：34）

Endnotes:

[1](#) “ Mukhtasar Seeratur Rasool ” , Muhammad ibn Sulayman at-Tameemi.

この記事のウェブアドレス：

<http://www.islamreligion.com/jp/articles/206>

Copyright © 2006-2011 www.IslamReligion.com. All rights reserved.